

教養の本質は「多様な人生経験」であり、「インフラ政策」において絶対的に不可欠である。

京都大学大学院 正会員 藤井聡

1. はじめに

「教養」と言えば、世間一般ではまるで、クイズ番組での優秀な成績を修めるための「豊富な知識」を意味するごときものと認識されている。しかし、それは完全に間違いだ。その原義は文字通り、「教え、養う＝育てる」事であり、それが転じて、それを通して身につくものを意味する。だから教養があるとは、しっかりと教え育てられたという事を意味しているのであり、逆に、教養がないとは、さして教えられても育てられてもいないという事を意味する。したがって、教養は、人間実践におけるありとあらゆる局面において重大な役割を担うのであり、その実践の質は教養の有無、高低によって直接的に規定される。

かくして、地域的スケールから国土的スケールに至るまでの様々なインフラの整備、運用、管理といった「**インフラ政策**」という実践を行うにあたって、その**インフラ政策実践の「質」の水準は、その実践者（＝土木技術者）の教養の水準によって直接的に規定される**。教養ある人間のインフラ政策は人々に幸福をもたらす一方、教養無き人間のインフラ政策は人々を幸福に導くどころかむしろ、かえって**不幸をもたらす**。本稿では「教養」の概要を触れた上で、それが如何にインフラ政策において重大なのかを指摘する。

2. 豊富な人生経験によって、教養が身に付く

先に指摘したように教養とは教え養われたものであるから、学校教育がその形成に重要なのは論を待たない。しかし、学校教育で形成されるのは、教養のごく一部だ。そもそも、誰もが自らの生活を振り返れば容易に見て取れるように、今日一日の様々な振る舞いやその背後にある判断を規定している自らの内面・精神は、学校教育以外の実に様々な経験で培われたものだ。言葉や言葉遣い、立ち居振る舞い、さらには家族や友人達との会話、そして、上司や部下との人間関係の円滑化と、それを踏まえた様々な用務、実務。さらには、一人での通勤途上や食事中にあれこれ考えるよしなしごとと、その中でぼんやりと立ち現れる「今日は何しようか」「この仕事をどうやって修めようか」といった様々な問題と、それら一つ一つにおける逡巡と判断。それらの当たり前の日常的、常識的な思考や判断、立ち居振る舞いや実践の全てを可能とせしめているのは、学校教育とはほとんど何の関係も無い、膨大な数の、生まれ落ちてから今日今時点までの全ての「**人生経験**」だ。

その経験とは、親兄弟と過ごした時間、子供の頃からの友人知人達との時間、自然や田園で戯れた時間、テレビや映画の鑑賞経験、友人との喧嘩や言い争い、その際に経験する怒り、反省、怯え、後悔、痛み、恐怖、道徳的判断の先鋭化、恋愛や痴話げんか、病気や怪我で痛かったり苦しかったりした経験、あまりに不道德な振る舞いを目の当たりにした時に沸き起こるに義憤やその被害者に対する憐憫の念、臥薪嘗胆の努力を重ねた上での達成感、勝利感やその逆の敗北感、他者に対する侮蔑の念や、逆に侮蔑された時に去来する強烈な不快の念、そしてこれら全てを追体験させる音楽、文学、絵画、戯曲等の芸術体験、そして永遠に忘れ得ぬ美しい夕日を見た刹那・・・こうした豊穡かつ膨大な経験があって始めて、我々の精神は「教え、養われ」られる。

それはちょうど、どのような種も乾ききった砂漠に放置しては芽など出ないし、出たとしても早晚枯れ果ててしまう他ない一方で、適切な環境で、豊富な水と養分が提供されれば、芽吹き、育ち、早晚その種が本来持っていたポテンシャルを余すところなく解放して巨大な樹木へと育っていくことと同じだ。つまりそれぞれの**人間精神は**、生まれ落ちたときには一つの「種子」に過ぎぬものである一方、**豊富な人間体験という教養が注ぎ込まれ続ければ、その教「養」が成長のための「養」分となり、その精神は芽吹き、育ち、巨大な樹木へと成長していくのである**（一般にこうした成長過程は、伝統的な西洋哲学では「可能態」から「実現態」

キーワード 教養、土木計画学、インフラ政策学、可能態、実現態

連絡先 〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4 TEL: 075-383-3238 FAX: 075-383-3236

への成長過程と捉えられる)。

そして、こうした人生経験によって我々の精神は、樹木が生い茂る様に、日に日に豊穡なるものへと成長していくのである。こうした「教養ある精神」と「教養無き精神」との最大の違いは、「予測」「推察」の精度の水準だ。ありとあらゆる経験を経た教養ある精神は、目の前の少女の眉の動かし方一つで、その少女の精神に何が去来しているのかを繊細に推し量ることができる。いや、推し量るというよりもむしろ「分かってしまう」。一方で教養無き精神は、そういう芸当が一切できない。どれだけメッセージを寄せられても、目の前の少女なり淑女なりの気持ちの一切を理解しない。唐辛子を食べた事のある人間は、それを食べ眉をひそめる他者を見た時にその他者がどのような感覚に陥っているかが容易に分かる。一方、生まれてから一度も唐辛子を食べたことの無い人物は、同じ振る舞いを見ても何も分からない。同じように、人生経験の極端に乏しい教養無き人間は、自らの精神の深みの大半を失っているが故に、他者の精神に何の興味関心も示さない。だから彼は獣のように目の前にある利益をむさぼる事に終始する以外の行動原理を持たなくなる。いわば、人の形をした愚鈍で野蛮な人あらざる存在となるのだ。それは幼児の頃にオオカミにさらわれ育てられたオオカミ少女の逸話が示すとおりだ。乏しい人生経験にしか恵まれなかった人々は、教養ある人物とかのオオカミ少女の間に引かれた一本の線の限りなくオオカミ少女側に位置する精神をしか持てないのである。

3. インフラ政策とは、愛する人への贈り物である。だから、教養と愛が絶対必須である。

道やトンネル、橋や広場といった様々なインフラを、どこに、どのように、何のためにつくり、それをどのように活用していくべきか——を考えるのが、インフラ政策、ないしは、土木計画である。それは土木であっても、その道や橋といった「物理的構造」をつくるという営みではなく、背景としての自然環境を見据えながら、その物理的構造物を「人間社会」の中にどのように定位するかを考える営みだ。だから、その目的は、そのインフラの上で暮らす人々の精神が、そのインフラ（政策）の有無によってどのように変化しうるのかを考える営みだ。それは、愛する人への誕生日のプレゼントを考えたりメッセージを送る精神の動きに等しい。そのプレゼントによって、そのメッセージによって、その愛する人はどう感ずるのかを推し量るために、我々は、自らの人生経験、すなわち教養の全てを全力で稼働させながら、最も適切なものを選ぼうとする。無論、これまで別の人生を歩んできた方に何を贈るべきか、俄には分からない。膨大な不確実性がある。時に当人に直接聞くことの方が適切なこともある。そうした可能性の全てを考えながら愛する人に喜んでもらいたい一心でひたすら考える——こうした精神の動きこそ、インフラ政策に関わる者に求められる精神のありようだ。つまり、その道や広場、橋やトンネル、さらにはその街や国土は全て、今を生きる、そして、これから生まれ来るであろう国民に対するプレゼントであり、メッセージなのだ。そこには膨大な不確実性がある。将来何が起こるか分からない。想定以上の地震や台風が来るかも知れない。ひょっとすると我々の教養不足故に、人々の精神に去来する全てを推し量ることができず、そのインフラが人々を幸福に導く事に実際には失敗してしまうかもしれない。インフラ政策に携わる人間は、全てこの一点に「恐怖心」を持っていなければならない。それは、そのインフラを使う人々に対する愛があるが故だ。愛する人を幸せにできない事に対する「恐怖心」——だから、贈ったプレゼントを喜んでくれた顔を見ると、心底幸せになるように、インフラ政策者もまた、自らが手がけたインフラで人々が幸福に暮らす様を見たとき、大きな幸福、喜びを得るのだ。無論、その幸福、喜びは、先に指摘した恐怖心と表裏を一体にするものだ。この安堵を伴う喜びと、恐怖心があるが故に、贈り物と贈り届ける側は、自らが持ちうる全てを賭して、受け取る側の幸福を願うのである。ここで賭す「全て」なるものは、「文字通りの全て」でなければならない。定量的な側面は当然のこと、経済的、社会的、文化的、芸術的、民俗的、地政学的なあらゆる「人生経験＝教養」を賭さねば、その「恐怖心」に打ち勝つことはできない。土木計画・学ないしはインフラ政策学とはすなわち、その国民を愛するが故に不可避免的に去来するその「恐怖心」に打ち勝つための教養を巡る研鑽を意味するのである。

(注)「教養」については例えば、エッカーマン『ゲーテとの対話』(岩波文庫、1968)を参照されたい。